



## 合従連衡その二 (連衡策の張儀)

1月②のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年1月10日(火)

「蘇秦の合従」論に対抗して「連衡」論を掲げ、「合従の約」を解体させたふてぶてしい「縦横家」が張儀(～BC309)である。

張儀は魏の人である。青年時代、「鬼谷先生」について遊説術を学んだが、同門に「蘇秦」がいた。蘇秦は当時から、張儀の才能には一目置いていた。

以来、「合従連衡」は、国際関係における権謀術数の代名詞として広く用いられ、張儀は「縦横家」の代表として蘇秦と並び称されることになった。

張儀は鬼谷先生から学んだ後、いよいよ遊説の旅に出た。

諸国を巡って、楚の宰相の食客となった。張儀が列席した宴会の席で、宰相自慢の「玉」が紛失するという事件が起こった。嫌疑は張儀に集中した。“あの男が臭い。金もないし、信用できないところもある”と拷問にかけられた。

辱めを受けて、故郷に帰った張儀に対し、妻は“遊説術なんか勉強するからこんな目に遭うのよ。いい加減に辞めたら”と言った。張儀は口を開けて、“どうだ、舌はまだ付いているか”“そりゃ、ございますとも”、張儀は妻に向かって言った。“舌があるなら大丈夫、俺はやるぞ！”

一方、蘇秦は、当時すでに「合従策」をもって趙王に遊説し、その信頼を得て、六ヶ国の合従策の実現に取り掛かっていた。

しかし、西の大国秦が、六ヶ国のどこかを攻めるような事態になれば、盟約の成立以前に崩れてしまう。

秦を牽制するには気心の知れた人物を秦に送り込んでおかねばならない。

そこで張儀に目を付け、同門の誼で成功している蘇秦を訪ねさせ、わざと張儀に恥をかかせ追い払った。その裏で張儀の秦への就職に物心両面の莫大な支援をした。そのおかげで秦の宰相になった時、張儀は蘇秦の支援だったことを知らされ、“あなたが健在な限り、私は秦において、趙を討つための献策など一切しない”と言った。

その後、蘇秦の死が伝えられると、張儀は秦の宰相として、策略により、魏と楚の同盟を破棄させた。替わって秦と同盟させ、六国の「合従」を崩し、更に韓王を説得し秦との同盟を成立させ、その威力を言い立て、斉・趙・燕の諸王を説き伏せた。

ここに「六国の合従」は完全に崩れ、これに替わって秦を盟主とする「連衡」が成立した。

参考：(司馬遷史記、張儀列伝、徳間書店)